

学会報告奨励賞

「福音書」のメフィストフェレス

—ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』にひそむもうひとりの悪魔—

宮 澤 淳 一

Ⅰ エルサレム・セクションの謎

……ピラトのもとに現われたこの男は、中年で、ひじょうに感じのよい端正な丸顔で、肉づきのよい鼻の持主だった。髪の色はなんとなくはっきりしない。しだいに乾きはじめていたいまは、白っぽく見えた。国籍を判断するのはむつかしかった。その顔で特別に目立っていたのは、おそらく善良そうな表情であっただろうが、もっとも、目が、いや、もっと正確に言うなら、目ではなくて話相手を見るとき目の使いかたが、その表情をいくぶん損ねていた。普通、来訪者は小さな目を、いくぶん奇妙で、まるで脹れあがったみたいな瞼で軽くおおっていた。そんなときには、細めに開いた目には、悪意のないいたずらっぽさが輝くのだった。この客がユーモアの輝きを目から追い出し、突然、瞼を大きく開いて、話相手の鼻にあるほとんど認められないほどの小さなしみをすばやく見つけようとでもするかのように、相手をまじまじとみつめることがあった。これはほんの一瞬しかつづかず、そのあと瞼はふたたび軽く閉ざされ、目は細くなり、そこに善良さといたずらっぽさが輝きはじめるのだった。[『巨匠とマルガリータ』第25章⁽¹⁾]

ミハイル・ブルガーコフ(1891—1940)の遺作『巨匠とマルガリータ』(1929?—40)は複雑な作品構造をもち、さまざまな構成上の謎を秘めた長篇小説だが、全篇を通じて、「この男」ほど不可解な登場人物はいない。「この男」の現われるエルサレム・セクションは、1920～30年代のソ連社会を描いたモスクワ・セクションにおいて、社会的に抹殺された「巨匠」と呼ばれる作家の書いた歴史小説として作品全体に巧みに織り込まれた舞台であり、それは、放浪の哲人ヨシュアの無実を知りながら、大祭司カヤパの圧力に屈して彼に死刑を宣告し、処刑場に送った第5代ユダヤ総督ポンテオ・ピラトの物語である。罪の呵責に

苛まれるピラトはこれを克服しようとして、ヨシュアを売った裏切り者のユダを暗殺するという復讐の行為に走るのだが、彼の決断に深く関与した謎の人物がいる。それが、「善良さといわずらっぽさ」^[2]を兼ね備え、ときとして相手をまじまじと見つめる端正な顔をしたこの中年の男、エルサレム・セクションの後半においてピラトの手足として働く、総督直属の秘密護衛隊長アフラニウス（Афраний: Afranius; Arthanius）である。

読者が初めてアフラニウスの名を知るのは作品後半の第25章「総督はカリオテのユダをいかに救おうとしたか」においてであるが、彼はすでに、ヨシュアの尋問を経て死刑判決が下されるエルサレム・セクションの導入部、第2章においてピラトの前に現われている。ユダヤ大祭司ヨセフ・カヤパとの会見を終えたピラトは暗い部屋の中で「頭巾で顔を半分ほど隠していた一人の男」^[3]と会う。この男はピラトに二言三言何かをささやいたあと、すぐに姿を消す。

次にこの「頭巾をかぶった男」は、第16章「処刑」で再登場する。ゴルゴダの丘の炎天下、彼は群衆や刑吏たちからひとり離れ、「十字架から遠くないところで三脚の小椅子に腰をおろし」^[4]てこっそりと処刑を監視するが、その終了後、他の役人たちとともに、ヨシュアから3人の受刑者の検屍を行なったのち、豪雨の中を立ち去るのである。

やがて、謎めいた頭巾の男は第25章において、ずぶぬれになってピラトの前に現われる。本稿冒頭の引用はそのときの彼の描写であり、ここで不気味な人物像が浮かび上がるが、ほどなく着替えをすませた彼は、「客」として、総督に処刑に関する報告を行なう。報告を受けたピラトは、「客」に、3人の処刑者埋葬の指令に始まる3つの依頼をするのだが、その2つめで、ピラトは「客」に、ユダヤ総督付き秘密護衛隊長の留任を求め、ここでようやくこの人物の身分が提示される。そして最も重要な3つめの依頼、すなわちカリオテのユダ暗殺を教唆する際、ピラトが彼の名前を呼ぶことによって、この人物の名がアフラニウスであることを、読者は初めて知る。

続く第26章「埋葬」において、アフラニウスはピラトの暗黙の命令に従い、オリーブ山にて、ヨシュアを売り渡した、いわば裏切り者であるユダを暗殺し、再び報告のためにピラトの前に現われる。

このように、アフラニウスは全4章から成るエルサレム・セクションすべてに登場しており、しかも、最初は読者が見落とすほどのさりげない形で存在が提示され、次にその不可解な行動が描写され、やがて身分と名が明かされることによってその行動の意味が裏付けられ、最後にセクションのクライマックス

で大きな事件を担う。作者ブルガーコフの行なった、このような登場人物の忍び込ませ方、役割の与え方は実に巧みで、無理がなく、また、結果として、あたかもこの人物がセクションそのものの起承転結を体現するような図式がここに現われているのだが、この秘密護衛隊長を軸としてエルサレム・セクションをもう一度仔細に検討する場合、彼の言動をめぐってひとつの謎が浮かび上がる。彼がピラトに対して行なうヨシュアの処刑に関する報告。その不可解な内容は小説の叙述と大きく矛盾するのである。

II アフラニウスの嘘

処刑の行なわれた晩、ピラトの前に現われたアフラニウスは、まず、処刑をめぐってさまざまな報告をするが、問題は十字架上のヨシュアについて述べた以下の箇所である。

「それで……磔の前に彼らに飲み物を与えたのか？」

「①はい。しかし彼は」ここで客は目を閉じた。「②飲むのを拒みました」

「それは誰が」とピラトは訊いた。

「お許してください、閣下」と客は叫んだ。

「わたくしは申しあげませんでしたか？ ナザレ人です」

「気ちがいめ！」なぜか顔をしかめて、ピラトは言った。彼の左目の下で静脈がぴくりと動いた。「太陽に焼きつけられて死にたいのか！ いったいなぜ、法に従って与えられるものを拒んだりするのだ？ どういうふうに言って彼は拒んだのだ？」

「彼は言いました」ふたたび目を閉じながら、客は答えた。

「③深く感謝し、自分の生命を奪ったことを責めはしない、と」

「誰を責めはしないだと？」

「そのことは言いませんでした、閣下」

「兵士たちのいるところで、なにか説教しようとはしなかったか？」

「いいえ、閣下、今度ばかりは、彼もあまりおしゃべりではありませんでした。彼が語った唯一のことは、④臆病を人間のもろもろの罪悪のなかでもっとも重要なものの一つとみなしている、ということでした」

「そのことでなにを言いたかったのだろうか？」総督の声が急に震えだした。

「それは理解できません。そもそも、彼の振舞は奇妙なものでした、もっとも、いつだってそうなのですからけれど」

「どういう点が奇妙だったのだ？」

「彼は絶えず、周囲にいる者を一人一人、じっと目をみつめようとし、

⑤絶えずなにか戸惑いがちな微笑を浮かべていました」

「それだけか？」と総督はしゃがれた声で訊いた。

「⑥それだけです」[第25章⁵⁾]

このアフラニウスの報告にはいくつかの嘘がある。それは、下線部①から⑥に相応する、次の6点にしぼることができるだろう。

① 受刑者に対し、処刑前に水を与えたという事実は、少なくとも叙述にはない。水を含んだ海綿は、処刑中に、それも槍を突き刺す直前に、ヨシュアにのみ、差し出された。しかも、ヨシュアの願いによって、初めて他の受刑者にも与えられた。

② 十字架上のヨシュアは水を拒まなかった。「法に従って与えられる」この水を、拒むどころか、彼はむさぼるように吸った。

③ 「深く感謝し、自分の生命を奪ったことを責めはしない」などとは言わなかった。

④ 「臆病」についての「説教」はしていない。

⑤ ヨシュアは当惑げな微笑をたたえてはいない。

⑥ 処刑の事実は「それだけ」ではなかった。ピラトに対してアフラニウスがなぜか伝えなかった事実がある。処刑の最終段階において、死刑執行人が「寛大な総督閣下を賞め讃えよ！」と叫んでヨシュアの心臓を突き刺したのだが、そのときヨシュアが「閣下……」とつぶやいて息をひきとったことを、アフラニウスは一言も触れていない。

文学作品において叙述が真理を語るのであれば、それに矛盾する秘密護衛隊長の報告は虚偽である。なぜ作者ブルガーコフはアフラニウスに嘘をつかせたのだろうか。さりげない描写ではあるが、このくだりにおいてのみ、アフラニウスはあの特徴的な目を閉じながらピラトに答える。この点を考えても、作者はこの護衛隊長の報告に特別な意図をこめているように思えてくる。とすれば、彼の偽りの報告がピラトの心理と行動に、ひいてはエルサレム・セクションの展開に、どのような影響を与えたのか。そもそもアフラニウスの存在意義とは何なのか。

『巨匠とマルガリータ』の研究史上、いちはやくアフラニウスの問題に焦点をあてたアメリカの研究者リチャード・ポープは、上述のピラトとアフラニウスのやりとりを「ある種の残酷なゲーム」と呼んだが⁶⁾、この「ゲーム」はピ

ラトにどのような効果を与えたのか。「ゲーム」進行中の叙述にはピラトの心理の直接的な描写はなく、また「ゲーム」終了後、ピラトはすぐに新たな指令を護衛隊長に下してしまふ。そこで、彼の意味決定に到るまでのピラトの心理変化のプロセスを推理するならば、次のようにならう。

ピラトはヨシュアに水を与えるようにとアフラニウスに命じてあったが、それはヨシュアを処刑台に送ったことに対するせめてもの償いと憐れみの気持ちをヨシュアに受け取って欲しかったからに違いない。ヨシュアが水を飲んだことを知れば、ピラトの自責の念は多少なりとも報われたであろう。また、ヨシュアが「閣下……」とつぶやいたことを聞けば、ヨシュアがピラトを赦そうとしたのではないかという希望を抱くことができたかもしれない。

ところがアフラニウスはヨシュアが水を拒んだと伝えた。これではピラトの自責の念と、それを償おうとしてヨシュアに投げかけた憐れみの心は、一切受け入れられなかったことになる。しかも、ヨシュアが「深く感謝し自分の命を奪ったことを責めはしない」と言ったと聞けば、ピラトはますます困惑してしまふ。ピラトの罪をヨシュアが赦したようにもとれるが、ここではヨシュアが誰に「感謝」し、誰を「責めはしない」のかがあえて語られていないのである。ヨシュアは自分を赦してくれたのだろうか、いや、そうではないのだろうかと思ひあぐねるピラトの不安は心の中で渦を巻く。そして彼の動揺にとどめを刺すかのごとく「臆病は最大の罪の一つ」がアフラニウスの口から告げられる（のちにピラトはレビのマタイの持っていた羊皮紙の中にもこの言葉を発見する）。ピラトは、自分の言動がすべて「臆病」にもとづくものであり、そしてそれが最大の罪に値することを悟り、深い衝撃を受ける。しかも、ヨシュアの「当惑げな微笑」は、逆にピラトがヨシュアに憐れまれていたようにピラトには思われ、自分の行動がすべてヨシュアに見透かされていたのだと感じ、さらに深い心の傷を負うのである。

「残酷なゲーム」の結果、ヨシュアに対する憐れみの念は、ここで復讐の念に変わる。憐れみの気持ちはヨシュアに受け入れられず、ユダヤ総督という権力者の立場上、彼に死刑を宣告して死へ追いやらねばならなかった自分の罪は償われなかった。アフラニウスの証言からすれば、ヨシュアが「語った」ように、自分の罪が「臆病の罪」、しかも最大の罪のひとつであるのなら、その「臆病」を克服するしかない。そのための最後の手段は、ヨシュア逮捕・処刑のきっかけを作った裏切り者カリオテのユダを殺すことなのだ、とピラトは考える。こうして彼はアフラニウスに対し、3人の処刑者の死体の埋葬を指図し、

護衛隊長の留任を求めたあと、ユダがその晩に間違いなく殺されることをほのめかし、彼にユダを「守る」ように、すなわち暗殺するように命ずるのである。

「男 [=ユダ] のあとをつけて殺し、そのうえ、受けとった金額を調べて、カヤパに金を返さなければならぬのであります、たった一晩でこれだけのことを残らずやっつけてのけられますでしょうか？ しかも今日のうちに？」
 「それでもとにかく、今日、彼は殺されるのだ」ピラトは頑固にくり返した。「わたしには予感がする、ほんとうにそうなのだ！ 予感がわたしを欺いたためしは一度もなかった」このとき総督の顔に痙攣が走り、彼はちょっと手をこすった。

「わかりました」と客はすなおに答え、立ちあがり、身体をまっすぐに伸ばすと、不意に顔をくもらせてたずねた。

「それでは、彼は殺されるのですね、閣下？」

「そうだ」とピラトは答えた。「それで、希望はただひとつ、誰をも驚嘆させる有能なおまえの手腕に託されているのだ」[第25章⁽⁷⁾]

こうしてユダ暗殺を誘導されたアフラニウスは、指示どおりそれを遂行し、そののち報告のために再びピラトの前に現われる。

しかし、考えてみると、誘導されたのはアフラニウスではなく、むしろ「ゲーム」の罠にはまったピラトの方ではないだろうか。アフラニウスが真実の報告をしていれば、おそらくピラトの償いの行為はその時点でとりあえずは成就したことになり、彼の自責の念は軽減され、少なくともユダ暗殺の指令は下さなかつたらう。とすれば、ピラトの心理を操作し、ユダ殺害を企てたのは、すなわち、ユダ暗殺の真の首謀者は、アフラニウスだったことになる。いったいこの秘密護衛隊長の正体とは何なのか。

ポープは、アフラニウスの正体についてさまざまな可能性を探っているが、そのひとつの見解として興味深いのは、アフラニウスがヨシュアの「弟子」だったのではないか、つまり、レビのマタイ同様、ヨシュアの熱狂的な信奉者のひとりであったのではないか、という説である。確かにマタイが羊皮紙に記していたのと同じ、「臆病は最大の罪である」という、ヨシュアの（と思われる）教えをアフラニウスも知っていたし、マタイ同様、裏切り者ユダに復讐したかったのだとすれば、彼もまたヨシュアの「弟子」だったと考えられなくもない。

ソ連の研究者 B・B・ソコロフも『巨匠とマルガリータ』のコメンタリーで指摘しているように⁽⁸⁾、アフラニウスの名はタキトウスの『年代記』等に記された実在の人物、ローマの護衛隊長アフラニウス・ブルスに由来する。彼は哲学者のセネカとともに若きローマ皇帝ネロ（在位紀元54—68年）の指南役を務め、「ブルスは軍人らしい忠勤さと厳格な私生活とで、セネカは雄弁術の指導と礼儀正しい思いやりとで、同じほどにネロに睨みをきかしていた」⁽⁹⁾という。紀元62年に病没した（ネロによる毒殺の説もある）この人物は、暴君化したネロの命でネロの母アグリッピーナ暗殺を指揮することにもなったが、興味深いことに、ブルガーコフが読んでいたであろう歴史家エルンスト・ルナンの著作『アンチキリスト』（1873）の中で、「正義と有徳の人」として描かれ、使徒パウロとの直接の接触はなかったものの、パウロの人道的な振る舞いに間接的に影響を与えていたらしい、と書かれている⁽¹⁰⁾。主人をコントロールしたこと、暗殺を行なったことは、確かにブルガーコフの護衛隊長の行動と共通する事実であるし、キリスト者を迫害する立場にありながら、彼らと何らかのつながりを匂わせるこの司令官の面影は、ヨシュアを処刑する権力側の人間でありながら、その中心であるピラトを翻弄することによって、裏切り者の「弟子」の殺害を企てるアフラニウスの姿と重なりあうものを感じさせなくもない。ポープの見解に説得力を多少なりとも与えてくれるものではある。

だが、ヨシュアの「弟子」などというこじんまりとした枠をあてはめただけで、ピラトを翻弄したこの人物の存在意義を語りきるのでは不十分である。ピラトという人物の運命を決定づけたことが、エルサレム・セクションの中で、さらにはモスクワ・セクションとの関連をも含めた作品全体の中で、物語の展開にいかなるダイナミクスを生み出しているのかを論じる必要がある。

III 臆病者の系譜

ところで、そもそも第5代ユダヤ総督ポンテオ・ピラトという人物は誰なのか。

無実の人間を見殺しにしたために苦悩する登場人物というのは、『巨匠とマルガリータ』以前に書かれたブルガーコフの作品に繰り返し現われている。その代表的な人物が1922年に発表された短篇『赤い王冠』の主人公である。彼は革命直後の内戦の際に義勇兵に加わった弟を見殺しにしたことに罪の意識を抱き、精神病院にこもり、その苦しみに永遠に苛まれる。長篇『白衛軍』（1923-4）を頂点とする内戦を扱ったブルガーコフの初期（すなわち20年代前半）の

いわゆる「内戦もの」の多くがこのような人物を扱っているだけではなく、未完成に終わったふたつの小説『秘密の友へ』（1929）や『劇場小説』（1936-7）の主人公たちもこの影をひきずっている。彼らは内戦の渦中であって、さまざまな殺戮が行なわれるのをただ黙って見ているよりほかなかった軍医ブルガーコフの原体験を反映した人物たちであり、これらの人物に共通の特徴は苦悩を克服しようとする行動を一切とらない消極的な態度である。

しかし、1928年に完成された戯曲『逃亡——八つの夢』の登場人物フルードフ司令官の場合は違う。革命の戦禍を避けてコンスタンチノーブルへ向かう人々の逃亡生活を描いたこの戯曲では、フルードフは無意味な戦争に加担し、おまけにいたずらに部下を殺したことにより、罪の意識ゆえの不安と恐怖に苛まれる。やがて作品の結末で、罪をつぐなうために処刑されるのを覚悟で亡命先から故国へ帰って行く。永遠の苦しみから解放されなかった従来の登場人物たちとは異なり、みずから罪をつぐない、苦悩に終止符を打とうとする積極性が彼にはあった。このような性格をブルガーコフが登場人物に与えたことは創作上の大きな変化といえよう。

そして『巨匠とマルガリータ』において、この苦悩する人物はふたりに分裂する。エルサレム・セクションではピラト、そしてモスクワ・セクションでは作品全体の主人公、巨匠である。ここで忘れてはならないのは、『巨匠とマルガリータ』において「臆病の罪」という概念が導入されたことである。ピラトが苛まれ、克服しようとした苦しみは、「臆病の罪」と名づけられた。

作品の中でこの罪が罪としてはっきりと語られるのはエルサレム・セクションだが、実は「臆病 трусость」という名の罪は聖書にはない。ブルガーコフの友人たちの回想で、彼が「臆病」を最大の悪徳として常に憎んでいたことがよく触れられているように⁽¹¹⁾、これは彼独自の罪の概念なのである。трусостьの辞書的意味は、「何かを前にしたときの恐怖の感情であり、その感情を抑制できないこと」⁽¹²⁾である。「臆病者」のことを трус と言うが、かつて трус は трепет や трясение といった「震え」ないしはその心理作用を表わす「動揺」や「心配」を意味していた。つまり、臆病の念とは、何かを前にして恐怖のあまり身体が震え、怖気づいてしまう心理状態を表す⁽¹³⁾。「震え」とは、限界状況において、正しいものを正しいと言えず、間違いを間違いと言えない人間の弱さ・醜さに対処しきれないときに起こる、精神状態の極度の緊張より発するものだろう。作者ブルガーコフが戦争体験において苛まれ、どうしても拭い去ることのできなかつた罪の意識を最も的確に表現する言葉がこの「臆病」

だった。それゆえブルガーコフはこの罪を「もろもろの罪悪の中で最も重要なもののひとつ」としたのかもしれない。

では、モスクワ・セクションの「臆病者」である主人公の「巨匠」はどのような形象になったのだろうか。

ポンテオ・ピラトについての小説を書きながらも、文壇から抹殺された巨匠は、おのれの「臆病」に甘んじ、その「罪」を克服せず、どこにも安らぎを見出すことができず精神病院に閉じこもっている、頼りなく、弱い存在として描かれる。すなわち彼は「内戦もの」に典型的な、いわば、消極的な「臆病者」だが、ここでブルガーコフの創作手法上、新たに救済者として悪魔ヴォランドが現われる。ヴォランドは巨匠の愛人マルガリータに魂を売らせることによって彼を「安らぎ」の世界へ救済する。

これとは対照的に、巨匠の書いた小説の主人公ポンテオ・ピラトはユダ暗殺という自力救済を試みることから、『逃亡』のフルードフよりもさらに積極的な「臆病者」である。しかし彼にしてもアフラニウスの「ゲーム」がなければユダ暗殺を行なわなかったのであって、アフラニウスもヴォランド同様、「臆病者」の救済者、あるいは少なくとも「臆病者」による自力救済を手伝った存在といえる。

このようにして『巨匠とマルガリータ』においては、「臆病者」は積極的な「臆病者」と消極的な「臆病者」のふたりに分裂し、どちらにも彼らの救済者が介在するという創作手法上の変化があったことが確認された。

IV アフラニウスの正体

以上の考察をふまえるとすれば、ピラトの自力救済を促すアフラニウスの正体をどのようにとらえたらよいのか。

『巨匠とマルガリータ』のエピグラフはゲーテの『ファウスト』からとられている。

「……それで結局、おまえはいったい何者なのだ」「わたしは永遠に悪を欲し、永遠に善をなすあの力の一部です」(第1335行)⁴⁴⁾

ファウストの問いに答えるこの悪魔メフィストフェレスの自己紹介の言葉、それは、ファウストの遍歴を見るまでもなく、常に「悪」を欲しながらも、結局は「善」なる神の意図を促進し、人間の善行を成就させてしまう弁神論的な

悪魔の働きを述べたものである。

従来このエピグラフに関しては、多くの研究者がヴォランダの存在意義を語るために、そして『巨匠とマルガリータ』という作品全体を解釈するために言及してきた。悪魔ヴォランドはその部下を引き連れ、モスクワに現われ、人々を惑わすが、彼らの目的は巨匠とマルガリータの救済にあった。彼らはマルガリータに魂を売らせ、悪魔の大舞踏会の女主人を務めさせるという「悪」を求め、それによってこの二人を救済し、「安らぎ」の地へ向かわせるという「善」を行なう。ヴォランドという名前はドイツ語読みすれば「フォーラント」であり、悪魔の古い呼び名だが、『ファウスト』の中ではメフィストフェレスの別称として出てくる（第4023行）ことから、やはりヴォランドはメフィストフェレスなのだという主張は妥当であろうし、この『巨匠とマルガリータ』という作品を『ファウスト』のパロディーとしてとらえる考え方も素直に認められよう。しかし、大半の研究者はこのエピグラフの問題をモスクワ・セクションに限って考え、エルサレム・セクションについては何も論じてきていない。なぜなら、悪魔が登場するのはモスクワばかりであり、エルサレム・セクションは神話性を払拭した歴史小説という設定をとっており、超自然的要素は一切排除されているからである。

だが、それは外面上のことである。エルサレムに悪魔がいて登場人物に影響をおよぼすとしても、その手段として魔力を使わないのであれば、いっこうにかまわないのではないだろうか。巨匠に対してはヴォランド、ピラトに対してはアフラニウスという、「臆病者」に「救済者」が対置される図式が明らかになった以上、アフラニウスの謎めいた瞳の奥に、ヴォランド同様、メフィストフェレスの姿が見えてくるだろう。ピラトの「臆病の罪」を自覚させ、良心の呵責の念をますますつのらせるアフラニウスの言動は、はかり知れない悪意に満ちている。ピラトは「臆病の罪」を克服するために、その裏返しである復讐の念に燃え、「裏切り者」ユダの暗殺をアフラニウスに指示する。ユダ暗殺は外面的には徹底的な「悪」だが、ブルガーコフにおいて殺人は本質的には「悪」ではない。作品の第26章の題名が「総督はカリオテのユダをいかに救おうとしたか」であり、また、小説の結末で巨匠とマルガリータがヴォランドの部下アザゼロに毒殺されることで最終的に「安らぎ」の地へ召されていくことをも考えれば、「殺人」はひとつの救済行為であり、究極的には「善」なのである。

以上のように、ピラトという「臆病者」の心理を弄ぶという「悪」を行なうことによって、アフラニウスは、ピラトにユダ暗殺という徹底的な「悪」を

——しかし本質的には救済行為という「善」を——行なわせる。その目的は、ピラト自身の贖いを導き、彼をヨシュアの待つ「善＝光」の世界へ向かわせるところにあった。その意味で、アフラニウスは「永遠に悪を欲し（＝ピラトの心を惑わし）、永遠に善をなす（＝ピラトの自力救済を成就させる）あの力の一部です」とみずからの存在意義を語るエルサレムのメフィストフェレスなのであり、モスクワ・セクションで悪魔ヴォランドがマルガリータに魂を売らせるという「悪」を行ない、巨匠とマルガリータを救済するという「善」を成就させるのと好対照をなしている。ブルガーコフは『巨匠とマルガリータ』において、モスクワとエルサレムという2つのセクションにそれぞれ「臆病者」を設定し、それぞれにメフィストフェレスを登場させて、彼らを救済に導くという手法をとったのであり、この両セクションが有機的な補完性をなす、小説全体の作品構造との密接な関係がここにもひとつの形として示されているように思われる。

なお、ここにひとつの疑問が残されているが、それは別の機会に考察したい。すなわち、救済された「積極的な臆病者」ピラトと「消極的な臆病者」巨匠との運命をめぐる問題、言い換えれば、なぜピラトが「光」に値し、巨匠は「安らぎ」に値したのかという、作品の創作手法のみならず、主題に係わる謎である。

註 本稿の考察に用いた原文テキストおよびその翻訳は以下のもの。

Булгаков, М., *Белая Гвардия, Театральный роман, Мастер и Маргарита*, М.: Худож. лит., 1973, с. 423-812. (いわゆる《芸術文学版》)

『巨匠とマルガリータ』(水野忠夫訳), 『集英社ギャラリー [世界の文学]』第15巻, 集英社, 1991, pp. 295-658.

この註においてはテキストの引用ページを原文、翻訳の順に併記する。

なお、その他の信頼できるテキストは次の2つ。

Булгаков, М. А., *Мастер и Маргарита*, Frankfurt: Possev-Verlag, 1969. (いわゆる《ポセフ版》)

Булгаков, М. А., *Избр. произв.:* в 2 т. Т. 2, Сост. и коммент. Л. М. Яновской, К.: Дніпро, 1989, с. 334-722. (いわゆる《ドニプロ版》)

(1) с. 718; p. 574.

(2) там же; *ibid.*

(3) с. 455; p. 183.

(4) с. 590-1; p. 317.

(5) с. 721; p. 577.

- (6) Pope, Richard W.F., "Ambiguity and Meaning in *The Master and Margarita*: The Role of Afranius," *Slavic Review*, vol. 36, no. 1, March, 1977, p. 13.
- (7) с. 724; pp. 579-580.
- (8) Булгаков, М.А., *Мастер и Маргарита*, Сост. и коммент. Б. Соколова, М.: Высш. шк., 1989, с. 549.
- (9) タキトゥス『年代記』(国原吉之助訳), 『世界古典文学全集』第22巻, 筑摩書房, 1965, p. 221.
- (10) Renan, Ernst, *L'antechrist*, Paris: Calmann-Lévy, éditeurs, p. 6. (出版年不明)
- (11) 例えば以下の回想録の中の2人の証言。
Воспоминания о М. Булгакове: Сборник, М.: Советский писатель, 1988.
- ① 「人間の悪徳の中で最大のもは何だと思う？」あるときブルガーコフは突拍子もなく私に尋ねた。私は困り果ててしまい、知らない、そのことについて考えたことはない、と言った。
 「僕は知っているよ。臆病こそ最大の悪徳なんだ。つまり、残りの悪徳はすべてここから出てくるんだ」[1930年代にモスクワ芸術座の文芸部でブルガーコフといっしょに仕事をした演劇研究家のヴィターリー・ヴィレンキンの回想 с. 294-5]
- ② 臆病をいかに憎んでいるかを繰り返し語るのがブルガーコフは好きだった。彼の語るところによれば、人間の卑劣さはすべてここから生まれるのだ。文学においても同様である。[1920年以来、彼の最期の日まで交友関係を続けたセルゲイ・エルモリンスキイの回想 с. 429]
- (12) Академия наук СССР, *Словарь русского языка*, т. IV, М.: Русский язык, 1984, с. 420.
- (13) Цыганенко, Г.П., *Этимологический словарь русского языка: Более 5000 слов*, 2-е изд., перераб. и доп. К.: Рад. шк., 1989, с. 437.
- (14) с. 423; p. 297.

The Mephistopheles in the Evangel: the Role of Afranius in the Jerusalem Section of Mikhail Bulgakov's *The Master and Margarita*

Junichi MIYAZAWA

The Jerusalem section of *The Master and Margarita* (1929?-40) is a story of a man of agony, the cruel fifth Procurator of Judea, Pontius Pilate, who executed a vagrant philosopher, Yeshua Ha-Nozri, knowing his innocence. In this section, which is written as a historical novel independent of supernatural phenomena, there is an enigmatic figure who rules its world secretly: Afranius, the chief of the secret service to the Procurator.

The enigma of Afranius lies in his false report to Pilate of the last moment of Yeshua on the cross: the chief didn't tell him the fact that Yeshua had accepted his atonement and died forgiving him for his conviction; on the contrary, he described Yeshua as if he had ridiculed Pilate and gave him the false words of the philosopher that "cowardice is one of the worst human sins." Having heard the report, Pilate became aware of his sin, so that he instigated the chief to assassinate the betrayer Judas of Karioth in revenge for Yeshua's death. In that sense, it was Afranius who kept Pilate on a string to let him do "evil" of the assassination.

The figure of Pilate is not a typical Bulgakovian "coward" who often appears in the earlier novels of Bulgakov, such as the hero of *The Red Crown* (1922): Pilate is not a *passive* "coward" who finds no hope and is always in despair, but an *active* "coward" who tries to do anything, even "evil," to expiate one's sins like Frudov of *The Flight* (1925-8). At the end of the whole novel, Pilate is led to the world of "light or good" for his activeness. He stands in contrast to The Master of the Moscow section who is a typical passive "coward" so that he only has earned "rest."

If we admit the systematical consistency of *The Master and Margarita* and analyze the two "cowards" of the two sections in comparison, we must find out the figures who help the decision of their fates as well: in the Moscow section it is Woland, the Faustian devil, who leads The Master to the fate of "rest"; in the Jerusalem section the other who leads Pilate to the fate of "light"—must be Afranius! He is nothing but a Mephistophelian figure which is the "part of that power which eternally wills evil and eternally works good" (the epigraph from *Faust*). Thus, in *The Master and Margarita* there is not only a single Mephistopheles who controls the Moscow section and determine the fate of the hero, but also another Mephistopheles in the Jerusalem section to do the same work. Bulgakov has the device to give the function to the two devils to develop the both stories. His effort leads to the reconstruction of the whole novel as a newly organized evangel, "The Evangel by Bulgakov."